

彫工小松光春について

No.374

白幡神社（市内早野）の拝殿の向拝（御拝とも、正面階段の庇の部分）中備（柱や組み物の間にある桁を支える支持材）に、玉を握りしめ火焰を棚引かせている龍が配されている。木鼻（頭貫や虹梁の端が柱の外側に突出している部分）の両端には振り向き獅子が添えられ、籠彫りは両方も「波に菟龜」で飾られている。それは防火の意味を表し、また長寿の意味をも併せ持つ。



▲「龍の図」中備 白幡神社

制作年は、龍裏面の刻銘により、昭和24年（1949年）5月で、彫工小松光春が手掛けている。住所や年齢は刻まれているが、他の作品により、光春は向島住で、歳は65歳と分かる。

光春の作が市内谷本の根之神社にも見られ、中備に設置されている龍は白幡神社のものより一回り大きい。木鼻は振り向き獅子で飾られている。残念ながらこの作品の制作年は不明である。

市内から離れ、国道128号線沿いの長生村金田に金蔵寺がある。境内に薬師堂があり、その中備には鳳凰が配されている。鳳凰の裏面に「大工棟梁大矢政治 彫刻師小松光春」と刻銘されている。

制作年は記されていないが、住職の談によると、昭和12〜13年頃のものという。

光春は一時茂原に住んでいたと伝えられ、他の作品は無銘ではあるが、八幡神社（市

内萱場）、御崎神社向拝（市内本小轡）に見られる。佐原の祭りでは有名な山車に、光春の作品が見られる。

荒久区の山車の格天井（昭和4年）や、八日市場区の山車の格天井にも見られ、箱書きには「御大典記念昭和三年十一月成」と墨書されている。他にも太閤記からの彫物なども刻し、出来は秀作である。

光春の系譜は後藤の流派で、龍鑑寺（市内七渡）の欄間を手掛けた名工長坂友雅の門人小松吉治郎から小松豊次郎、そして小松重太郎光重（光春の父・本所住）と続き、その光重の三男が光春である。

初代光重は明治33年パリ万国博覧会に出品し三等を受賞している。二代目光重は八王子の山車や高尾山薬王寺などの彫刻を手掛けている。

市内の光春の作品はあまり無く、技量はそこから汲み取るのは難しいが佐原の山車を見る限り、立派な力量のある彫刻師といえる。

茂原市文化財審議会委員

片岡 栄

文芸コーナー

人の河の中で

山本 明美

何処を見ても人 人  
大人 子供 老人  
男 女  
一体何百人  
何千人居るのだろう

同じ言語を話し  
笑い歩く人 人  
肩が触れ合う程  
近くに居ても  
この人達の  
誰をも私は知らず  
挨拶も交わさない

師走の  
同じショッピングセンターの  
たまたま同じ時間に  
居合わせた  
それだけのお互い  
全く無関係な間柄

忙しく行き交う  
人波の中に居ると  
ここはまるで  
異郷の街で  
冷たい風だけが過ぎる

そんな時  
少し離れた前方から  
見慣れた笑顔が一つ  
手を振りながら  
走って来る姿に頬が緩んだ

◎選評 斎藤正敏

何処をみても人、人、人。師走のショッピングセンターは人の波。たまたま同じ時間に居合わせた群衆への違和感。そんな時前方から見慣れた笑顔が一つ。思わぬ知人の出現に頬を緩める作者。群衆が持っているひとつの顔だ。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先（直接選評者へ）〒297-0032 茂原市東茂原7番地 斎藤正敏宛。  
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

